

白氏文集 四十五 病中哭金鑾子平成三十一年六

加藤淳平

白樂天の年譜に據らば、女兒金鑾子を失ひたるは三十九歳のことなりき。晩成の人たる樂天、三十
五歳にして漸く科擧の諸試験に合格し、官途に就きしかば、金鑾子を失ひし頃は、未だ少壯官吏の一人
たるに過ぎず、長安の首都行政に従事す。但し樂天、官途には晩成の人なりしも、詩業には然らず。十
六歳にして、時の文壇の有力者顧況の、才を認むるところとなり、若くして世に廣く詩才を知らる。
「長恨歌」も「新樂府」五十首も、三十代の、金鑾子が死より以前の作なり。詩に據らば、金鑾子はま
だ三歳の可憐なる盛り、十日病みて死すと云ふ。貧しき小役人の一家なれば、住む家も墓も侘しく、母
と近所の人々のみの密やかなる甲ひの後、家より三里（＝一五〇メートル）離れたる墓地に埋葬せる
ならん。衣紋掛けに架かる小さき着物と、寢床の枕元に散る飲み掛けの薬を残り、死に逝きし兒への
切々たる思ひ、詩を讀む者の共感を誘ふに非ずや。

病中哭金鑾子 病中金鑾子を哭す

豈料吾方病 豈料らんや 吾 方に病むに

翻悲汝不全 翻かへつて 汝が全からざりしを悲しむ

臥驚從枕上 臥して驚き 枕上よりして

扶哭就燈前 扶けられ 哭して 燈前に就く

有女誠爲累 女むすめ有るは 誠まことに累わづらひと爲すも

無兒豈免憐 兒無きは 豈憐れみを免れんや

病來纔十日 病わづひ來たつて 纔わづかに十日

養得已三年 養やしなひ得たる 已に三年

慈淚隨聲迸 慈淚 聲こゑに隨つて 迸はしほしり

悲傷遇物牽 悲傷 物ものに遇ふて 牽ひかる

故衣猶架上 故衣は 猶架上

殘藥尙頭邊 殘藥は 尙頭邊

送出深村巷 送おくりて 深き村の巷を出で

看封小墓田 小こさき墓田に 封むすざるを看る

莫言三里地 言いふ莫かれ 三里の地と

此別是終天 此の別れ 是終天なりき

（大意）まさか思ひもしなかつた。私自身が丁度病氣に罹かつてゐたとき、元氣だつたお前金鑾子が、
此の世を去つて行くのを悲しむことにならうとは。私は病床から驚いて起き上がり、お前の死を哭し
て、お前を祀る燈火の前に坐つた。女の兒を持つのは煩ひが多いと云ふが、たとへ女の子であっても、
兒の無いのは人の憐れみを免れない。病氣になつてわづか十日で、三年養ひ育てて來た兒が逝つてし
まつた。兒を思ふ涙は、聲を出す度にほとばしり出、形見の品を見る度に深い悲しみに牽かれる。小さ
な着物はまだ衣紋掛けに架かつて居り、飲み残した薬は寢てゐた枕元に散らばつてゐる。野邊の送り
に草深い村の巷を出て、亡骸なきがらを小さい墓地に埋葬するまでを見た。家からたつた三里の墓地への往復

だったとは言ふまい。これがこの世の訣れの旅だったのだから。

(令和元年八月三日受附)